

私の鵜沼日記

大佛次郎・幸田文の思い出



金田元彦 著

風間書房

私の鵠沼

江苏工业学院图书馆
藏书章

幸田文の思い出

金田元彦 著

風間書房

著者略歴

金田元彦（かねだ・もとひこ）

大正二三年 九月一八日東京に生る。

昭和二二年 誠之小学校卒業

一七年 関東学院中学部卒業

二二年 國學院大學文学部卒業

二六年 東京大学文学部言語学科研究科修了

元國學院大學文学部教授 日本文芸家協会会員

私の鷓沼日記

——大佛次郎・幸田文の思い出——

一九九九年 九月三〇日 初版第一刷発行
一九九九年 一月三〇日 初版第二刷発行

著者 金田元彦

発行者 風間 務

発行所 株式会社 風間書房

101-0051 東京都千代田区神田神保町一―三四

電話 〇三―三二九一―五七二九

FAX 〇三―三二九一―五七五七

振替 〇〇―一〇―五―一八五三

印刷 中台整版

製本 高地製本所

©1999 Motohiko Kaneda NDC分類：914

ISBN4-7599-1162-6 Printed in Japan

目次

幸田文さんと八甲田に登る	1
折口信夫と大佛次郎と	7
冬の紳士	15
『大佛次郎のすべて』	21
私の鵜沼日記	33
温野菜／シフォンケーキ／ゴールドデン・レトリバー／イタリアン・グレーハウンド／おスミちゃんのこと ／プリンス・ホテル／お吸い物／鯛茶すけ／初代『ごんたろう』／『殺しちめえ』／シヨーケン／嵐寛十 郎／ライオンを飼う／キツネを飼う／ジャガー／ホッチキス／真方敬道先生／如月小春／ストリップ／柳 橋新誌／坂東流／五月祭／東大研究生／辻直四郎先生／村瀬幸子さん／藤井貞和君／宮城君／もちへいや ／産婦人科／入院生活／てんぷら鍋／火の用心／達人の眼／二代目／雪のある風景／病む母／フライパン ／学士院賞／京マチ子／佐田啓二／『あらいくま』／文屋／おばあちゃん／銀座／沼津／ホテル焼き／ 『おぎんさん』／鈴木鈴太郎／誠之小学校／一高と東大／焼きまんじゅう／講演会／光源氏／白湯／ビデ オ・カメラ／池上季実子／「おメカケさん」／芥川龍之助の妻／井上先生／芥川比呂志／ふらんす友の会	

／研究室副手／北原さん／根津権現／『すいてごさま』／石田幹之助先生／吉屋信子／竹中直人／エノケン／真船嶺／真船豊／中沢けい／『入れ歯』／金田伝兵衛／松風／「稲村ジェーン」／同級生／ビデオ・カメラ／円地文子先生／『六代目』／新橋演舞場／M検／薮医者と名医／新派／『かさね』／新橋芸者／橋本研一君／雑書／『黒松』／良寛／歴史／写真機／安田健一君／たあいな話／勝新太郎／『き・つ・も・ちゃ・け・かいな』／湘南の海／塾／湘南文庫／林達夫さん／清元／自家用車／パン屋／『ドンク』／市川房江さん／講演会／シヤランQ／いたりあん・すうぶ／イタリア語／赤と黒／獅子文六さん／屋根／書斎／猫／ゴントロウ／留守番犬／古武士の知恵／栗田先生／『追い風』／電気自動車／あそぶ／秘書官／海外旅行ブーム／美少女／お父様の話／『杉浦武』／『おはんさん』のこと／『おはんさん』の話／中村錦之助／中村錦之助の家／矢島詩子さんへ／伊勢物語風に／二代目／絵かきの娘／春雷／インドの話／菊池武一先生のこと／映画『男の一生』

追憶の町・根津八重垣町

やつぱり

本鵜沼駅のこと

少年時

初出一覧

あとがき

幸田文さんと八甲田に登る

たしか幸田文さんが、『流れる』で賞をとり、『黒い裾』で賞をおとりになった頃と思う。その頃の私は、ある私立大学の語学研究室の助手、兼時間講師という、甚だ、心もとない身分であった。

本当は、「ブンガク」をやりたいかった。しかし、生活はきびしい。「ブンガク」でメシを食って行ける自信があるかというのと、全然ない。そこで、彼は考えた。——「ブンガク」の前に、なにがあるか。「ブンガク」の前には言語がある。言語だったら、なんとかメシをくっていられるかもしれない。これが甘かった。なぜなら、大学というところは、専任になるためには、すくなくとも、五講座ぐらいはもたなければならない。しかも、その当時、その大学の言語学概論は、金田一京助先生であった。先生は美髯をたくわえられて、悠然と講義をなさっていた。あと、二、三十年は大丈夫という雰囲気であった。当時、私は、本郷のある大学の言語学研究室で、モンゴル語の研究を五年ばかりやって、なんとかその大学を出たところであった。

当時のわが語学研究室には、岩波文庫に『シャーロック・ホームズの冒険』の名訳をされている菊池武一教授のもとに、英独仏語学の秀才が、雲のごとく、ワンサといた。但し彼ら秀才は、私より、全部年下であった。しかも、彼らは、談論風発、実に闊達無頼で当たるところ敵なしという具合であった。私は、助手という身分柄、彼らにお茶をだし、世間話をしなければならなかった。私は、なんとかして、この悪い環境から脱出しなければならぬとおもった。しかも、言語学概論を教えるにはあと二、三十年またなければならぬし、全く絶望的であった。しかし、私の恩師、金

田一先生は、さすがに頭がよく、「金田君に作文でも教えさせたら、どうかね」と提案してくださった。先生の提案は教授会を通り、私は、早速、「作文」を教えることになった。が、私は学生達に「作文」を教える才能などは、全く、なかった。そこで、当代一流の文章家は、どなたであろうかと思案した。

「幸田文」。まず、この言葉が、頭にピンときた。「そうだ、幸田文の弟子になろう」と思った。玄関の戸をあけると、下駄やなにかが、散乱していた、というのは、幸田文の名作『流れる』の冒頭の一節であるが、それとは対照的に、水を打って掃き清められた玄関の片隅に、きちんと、下駄が二、三足そろえられていた。

入門して、最初の仕事は、幸田さんから二万円いただいて、本郷の古本屋に行って「木」に関する本を買って来ることであった。当時の二万円は、私の月給の二倍くらいの額だった。多分、東大正門前の「井上書店」で、二万円分買って、小石川のお宅に、とどけたと思う。

次が八甲田行である。その頃、自家の近所のお豆腐屋さんに、マンガ家の岡部冬彦さんのお兄さんが下宿なさっていたのでその方に相談した。「幸田さんは、真つ赤なアノラックをお召しになりたいらしいのですが」といったら、彼は言下にそれを否定し、「幸田さんは、絶対、和服で行くべきです」。私は、それを録音して、すぐ、幸田さんに、お聞かせした。「紅葉をみにゆこう」ということであった。列車が三本木についたのは、真夜中であった。とりあえず、駅前の旅館で休憩し

て、車で、八甲田の「酸ヶ湯」に向かった。

ブナの原生林に入ったとき、黄葉の世界に紛れ込んだ気分であった。一面の落葉も「きいろ」。空も「きいろ」の木の葉にとざされて、これまた、黄色の世界であった。高い梢一面の、黄色の世界は、このまま山奥にすすんでゆくと、そこに、なぜか幸せの国があるような錯覚に陥りそうな気がしてならなかった。

「そんな気分のまま、山の奥へ奥へとすすんで、そのまま死んでしまう人があるそうですね」
ぼつりと、幸田さんが言われた。

おいらせ川のほとりで、ちょっと休憩していると、山から落ちて来た大石が木の幹にひっかかって、木はそのままたわんで、いかにも苦しそうな情景が目にはいった。

「金田さんには、あの木の悲しさがわからないでしょうね」

「……………」

「金田さんは、言葉はちゃんとおぼえているけれど、木がみえないんですね」
それから、しばらくゆくと、崖が半分くずれていた。山崩れのあとである。

「わたし、山崩れがかきたいんですよ。山崩れのすさまじい恐ろしさが」

山々の紅葉を堪能されたのは、幸田さんだけで、私は、それどころではなかった。もしも山で遭難してはいけないと思って、水や食料品をリュックサックいっぱい詰め込んで、二十キロくらいあ

るのを、ウンウン言いながら、かついでいるので、幸田さんが、いろいろ言ってくださっても、半分、上の空である。一旦、旅館にもどって、それから、下山することになった。

お財布は、私がお預かりして、支払いは、そこからすませていた。さて、下山となったが、タクシーの運転手が何のかのといって、なかなか、車をだしてくれない。業を煮やした私は、幸田さんに、バスをおすすめした。そして、乗った。乗ったとたんに、叱られた。

「金田さん、タクシーとバスでは、目の高さが、違います」

幸田さんと、一緒に旅行して、一番びっくりしたことは、旅館で一万円支払いがあると倍の二万円おいてくる。タクシー代にしてもそうで、かならず倍額支払われた。

その昔、林芙美子が、井伏鱒二と集金旅行をされたそうである。それが後の傑作『集金旅行』になるのだが、林芙美子の生まれ在所の鹿児島の人にいわせると、林芙美子さんのあとに、学生さんみたいな人が、ちょこちょこ歩いていましたよ——ということになるのだが、今度の旅行で、和服の美人作家のうしろから、いかにも気がきかなそうなボサボサ頭の、学生風の大男が、リュックをかついで、ウンウンいいながら歩いている様子を、どうながめたか、ちょっと、興味ある問題である。旅行が、おわりに近づいた時、幸田さんがふと、弱音をはいた。

「こんな時、土橋さんがいてくれたら……」

つぶやくように、言われたが、私は聞こえないふりをしていた。一泊二日の旅をおえて、上野駅

に着いた時、幸田さんは、すこし、あらたまった調子で、いわれた。
「これで、旅のおわりでございます」

折口信夫と大佛次郎と

たしか、その日は雨が降っていたような気がする。蒸し暑い日であった。

私たち学生は、三階の埃っぽい教室で、折口先生を待っていた。

一瞬、ざわめきが静かになった。折口先生がおいでになったのだ。先生と一緒に、背広を着た青年たちが、先生を取り囲むようにして教室にはいつてくる。彼らは、教室の一番後ろの席にすわる。

折口先生は、その日、茶色の麻の羽織りに、『ひわ色』のお着物を、お召しになっていた。多分、『源氏物語』の若菜の巻の講義だったと思う。今なら、多少は分かるかもしれないが、兵隊から、帰ったばかりのぼんくら学生には、何がなんだか、わからなかった。

先生は、教室の後ろの席にすわっている背広組を意識して、そちらに向かって、暗号のようなことをいわれる。例えば

山吹の花色ごろもぬしやたれ、問えど答えずクチナシにして

すると、教室のうしろに座っている背広組がどっと、笑う。これは、先生の背広組に対する、サービスらしい。

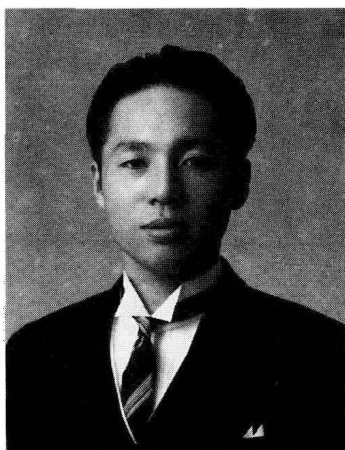
われわれ学生は、なんのことやらわからずにぼかんとしていた。

講義がおわると、先生を取り囲むようにして背広組は、先生と一緒に、研究室にはいつてしまふ。その、人垣は、もう大変なもので、先生になにか質問があっても、その人垣を打ち破って、先

生に近付くことは至難の技であった。あとから、考えると、その背広組こそ後の池田弥三郎さんや、戸板康二さんだったはずである。

ただ、われわれは、折口先生の講義だけは、熱に浮かされたように、伺っていたことは、たしかであった。

ただ、私の場合は、父が本好きであったので旧制中学の四年のとき、雄山閣の『国文学講座』を買ってくれた。そのなかに折口先生の『上世文学史』がはいっていたので、そっち方面のお話しは、半分くらいは、わかった。なにしろ、生意気ざかりの学生時代には、『金魚のうんこ』と一緒にするのは、御免を蒙ると、ばかりに、先生は尊敬しているが、あの背広組と一緒にするのはいやで、私は金田一先生に師事していた。それを、なんとなく折口先生がご存じで、私が金田一先生のお供をしていて、校門のところで、むこうから、いらっしゃる折口先生とすれちがったとき、折口先生は、金田一先生に向かって、「いいお弟子さんをお持ちでお幸せですね」と、おっしゃってくださった。その頃の私は国学院大学で勉強する一方、東京大学の研究室に通って、『モンゴル語』『ツングース語』『朝鮮語』などを勉強する一方、『アテネ・フランス』『ニコライ学院』などに通い、ふらんす語や、ろしや語もべんきょうしていた。それで、東京大学の方を修了して国学院大学に、文学部助手として、迎えられるのであるが、金田一先生や、菊池武一先生・佐藤兼三先生が、御相談の結果、金田君には、国文学をやってもらうと、決まってしまった。いままで、十年近く



青年時代の著者（昭和32年）

やってきた言語学を捨てて、国文学をやれというのだから、私としては、もう、大変なことであった。国学院大学に戻ってきたのが昭和二十九年、折口先生の亡くなった翌年だった。

しばらくしてから、中央公論社から、『折口信夫全集』が開始めた。私は、むさぼるように『全集』を読んだ。なくなった西角井先生が、折口先生にお会いしたいときは、いつも『全集』を読む、とおっしゃって

おられたがくる日もくる日も、通勤の電車の中でも、『全集』を読み耽った。そのうちに、藤井貞文先生のお作りになった、『索引』が出た。この索引は、先生が、心血をそいでお作りになった作品であるから、実にゆきとどいている。この、索引のお陰で、論文を書くとき、どのくらい役立ったかはかりしれないのである。そのうちに、第一次の『ノート編』が出た。たしか、文学史だけだったと思う。私は迷わず、『伊勢物語』から、はいり『源氏』にうつる計画をたてた。

そして、その頃、大学に通いながら、小石川の幸田文先生に師事していた。三年位、通ったとき、幸田文先生が、「あたしは、女だからあなたを教えるのには限界があるから、大佛次郎先生のところへ、いらっしゃい」と、すすめてくださった。そこで、私は、鎌倉の大佛先生に師事し、先

生が、亡くなるまで、おつかえた。およそ十五、六年になろうか。

折口先生が、亡くなって、五、六年たった頃の時、大佛先生が、「折口さんには、久米君のことで、随分、世話になった。」と、折口先生のことを語ったのを、今なお、鮮やかにおぼえている。

折口信夫風な言い方をすれば、日本の負け戦が、日に日に色濃く、国民の前に、姿をあらわし始めた頃のことである。久米正雄が、なにかを、ふと、言ってしまったために、窮地に追い込まれてしまった。その時、彼を助けることが出来ず、誰もが、口をつぐんでいた時、折口信夫が、つとたつて、彼の弁護をし彼のために、当局の納得の行くような論文を書いたというのである。文学報国会での話である。

その話を、大佛先生から、伺うとは全く、思いもかけなかったのだが、実にショックなできごとであった。当時、大佛先生と久米正雄氏とは、奥様どうしが、義姉妹であつたらしい。この話を、大佛先生から伺ってから、私の折口信夫観は、大きく変わった。

変わったというより、心が、ぐらりと傾いたと言った方が、いいかもしれない。

そして……、折口信夫は、あの大きさをもった大佛次郎にある好意を示すことによって、心を許そうと思っていたかもしれないのである。

「風貌姿勢」という言葉がある。

折口信夫も、大佛次郎も異なる「風貌姿勢」を示していた。だが、ある時期に、同じことを、考

えていたような気がする。口に出して言わなくても、なにかが解りあえたのかもしれない。おふたりとも、日本の風土を深く愛していたのに間違いはないのである。

折口先生のすごいことは、私たちが、自分では新しい研究のつもりで、論文の見取り図を書いていい気になっていると、たいていの場合、先生の全集に、かならず、その事項の解説がのっているのである。

私自身の研究について申せば、先生の指示によって、『伊勢物語』から、『源氏物語』に進んで来たことは、正しかったとおもっている。しかも先生の示してくださった、『王氏と他氏』の問題。この一点だけでも、ものすごい力を発揮している。

これは、先生の『文学史』に対するなみなみならぬ情熱のしからしめたものである。この一事がわからないために、どのくらい、無駄な努力をしている学者がいることか。多少、言いにくいことを、申し上げると、例えば、『伊勢物語』をとばして『竹取物語』『宇津保物語』から、『源氏物語』に研究を進めて来たひとは、どこかで、『源氏』の大事なところを、みすごしている。

私自身、霞会館で『衣冠束帯』の着付けを習い、『葵祭り』『春日祭』『石清水祭』などいわゆる、『三勅祭』に『衣紋方』として、奉仕して、はじめて、『王氏の文学』のなにものかが、わかった。つまり、平安時代このかた連綿と続いている宮廷行事に参加することによって、『伊勢物語』から『源氏物語』までつづいている『わかんどおりの文学』がわかった。これは、正しく折口学の指示